# ヴェトナムの血

小松 清 著

河出書房

# ソエトナムの血

小松　清著

河出書房

昭和二十九年七月二十日印刷
昭和二十九年七月二十五日発行

ヴェトナムの血
定価二九〇円
地方定価二九五円

著者 小松清
東京都千代田区神田小川町三ノ八
発行者 河出孝雄
東京都千代田区内幸町二ノ二〇
印刷者 森昌示

発行所 東京都千代田区神田小川町三ノ八 株式会社 河出書房
振替東京一〇八〇二番

# ヴェトナムの血

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

# 第一章

一九四六年。一月二十一日午前。インドシナ東京地方の首都河内。

太平洋戦争の終った八月のハノイは、蒸し風呂そのままの、湿度の高い暑さにつつまれていたが、それから幾月か経って、年があらたまると、毎日、東京地方特有のクラッシャンと呼ばれる細かな冷たい霖雨がふりつづけていた。その日の朝、連日の霖雨はやんでいた。しかし、雨雲の低くたれこめた鬱陶しい午前だった。赭茶けた落葉が濡れたコンクリート道路を埋めていた。

行人のまばらなビュジニュ路と大官道路の街角。フランス人ジャン・モレノの邸。ハノイの仏人住宅街にはざらにある、中流生活者らしい構えの邸宅である。鉄づくりの正門は、念入りに厳めしく、鎖でしばりつけられてある。いつ何時起るかわからぬ越南人――かつては安南人と呼ばれていたが、独立運動者や知識人はこの呼称を嫌って越南人とあらためた――の暴動に戦々兢々としている仏人の不安と恐怖をもの語っている。門から少し離れたところの電柱に《仏賊駆逐、完全独立》とかいた宣伝ビラがべたべた貼ってある。埃りにまみれ、痩せこけた棕櫚が二三本、手の這入らぬままに荒れ放題になった庭に寒々立ちすくんでいる。仏人の許で働いていると、忽ち越奸呼ばりをされる。それを懼れて、土地の庭師も苦力も出入りしなくなったからであろう。湿布のように、じっとり沁みこむ

冷たさ。室内で暖炉を燃しているのであろう、屋根の煙突から煙が懶るそうに流れている。

そのモレノ氏の客間に、先刻から、ひとりの年若い仏人が暖炉のあたりを頻りに往ったり来たりしている。すくっと伸びた長身の、均衡のとれた身体を、瀟洒なイギリス地の背広でつつんでいる。長身であるが、華奢な感じはしない。スポーツと戦場で鍛えた肉体の逞ましさが感じられる。齢はまだ三十になってはいまい。二十八、九といったところか。吃っと相手をみつめる亜麻色の瞳の鋭い光りには、恐怖の体験をあまり身につけたことのない不敵な若者の倨傲さのようなものがあった。白皙紅顔という修辞が自然と念頭にうかんでくる、美しく整った容貌の持ち主である。

暖炉のあたりを往き来していた美青年は、また立止って腕時計に眼をちらっとやった。そして、この家の主人のジャン・モレノの方を振り返って云った。

「おっつけ十時になりますが、ムッシュウ・ワダは来られるでしょうか？」

「私だって全能の神様じゃないから、万が一のことまで保証でき兼ねますがね、まあ、十中の八九、ワダはやって来ると思ってますよ」

と、むき出しの皮肉をこめて答えたモレノは、肘掛椅子に腰をおろして、まだ正午まで二時間もある時刻であるのに、インドシナ産の催食酒ペルノをちびりちびりのんでいた。額のぐっと禿げあがった、緑がかった碧い眼の、赭く酒やけのした鼻の大きなわりに、頬のぼそっと削げた、五十がらみの、南仏人らしい訛りをもって話す男だった。かなりひどいアルコール中毒とみえて、ぶるぶる手も顫えるし、舌ももつれるが、話好きで、見るからに人の好さそうな人物である。二十年、三十年と長い植民地生活をしたフランス人共通の、熱帯呆けと呼ばれる記憶喪失症が、阿片やアルコールの中毒症といっしょに彼のうちに巣喰っているのであろう。モレノの表情は常人のそれでない。いつも何か幻想か

執念に憑かれている感じである。

「ムッシュウ・ワダは、今朝ここにくるのを警戒しているんじゃないでしょうか？」と若い男が重ねて訊いた。

「そりゃあ、多少は警戒しているでしょうな。どんな用件で会いたいと云っていられるのか、貴方の意向が、まるで彼には通じていませんものね。今朝、私の宅で、ハノイのフランス代表部の人が、しかも何の某とも名もあかさぬ、軍人とも外交官とも得体の知れぬ人（と云ってモレノは、また皮肉な微笑みをにやりと洩した）が是非会って懇談したいと云っている、としかワダには通じてないのだから、ワダの奴が尻ごみしたって無理もないでしょうな。大体、この私が貴方の用件については、貴方のお名前と同じように、これっぽちも知らんのですからな。……ワダって男は、胆が太そうにみえて、その実、至って神経質なインテリですから、ひょっとすると、最悪の場合のことまで気を廻しているのかも判りませんな」

と云って、モレノは舌の先で下唇をなめずり廻したが、ふっと考えこむように眼をとじた。がいすぐ彼の追っかけている想念を振り切るかのように、つよく頭を振って、言葉の穂をついだ。

「いや、奴さん、たとえ、そんなことまで考えたにしても、きっとやってきますよ。まさか、この私が囮になって、彼をここまでおびき寄せる役を買って出るなんてことは、夢にも考えますまい。このモレノは酔っ払いで、お饒舌で、インドシナ呆けで、まるで使いものにならぬ、やくざな人間ですがね、まだいくら何でも、友達を売り渡す裏切者にまで成り下りはしませんよ。それだけは、ワダの奴も信用していてくれる筈ですよ」

モレノは、また唇の隅に、厭しい皮肉のこもった微笑みをうかべた。眼尻にちょっと皺が寄って、

その皺までが微かに笑っているようにみえた。しかし、努めて上機嫌らしく、朗らかにみせようとする心使い、皮肉やユーモアのうちに漂っている一抹の不安は何とも蔽いかくしえない。一体、この代表部の男は、ワダと会って、それでどうするつもりなんだろう？　戦犯として彼を押えたいのか、それとも彼を利用したいのか？

「モレノさん、貴方のところにお邪魔にあがってながら、私が名乗りをあげないことが、どんなに無躾であるか、それ位のことは私だってよく承知しているつもりです。まるで警察の人間みたいで、私も気がひけて仕方がないんです。が、とこ暫くのあいだ、御容赦願いたい。フランス代表部の用件だなんて、役人風を吹かしている訳じゃないんです。そこで、ムッシュウ・ワダについての用件ですが、これは極秘に属する事項なので、本人に会うまで、誰にも話す訳に行かないのです。これも貴方には大変失礼で、きっと気を悪くしていられるだろうと、そのことも判っているのですが、ムッシュウ・ワダに会うまでは、誰にも話すことが出来ないのです」

「……」

「しかし、モレノさんが先刻、ムッシュウ・ワダが或は最悪の場合を考えて、と仰言ったが、そのことについては、先日モレノさんにお会いしたとき、代表部の者がムッシュウ・ワダに会いたがっているのは、決してワダ氏の一身上のことについてではなく、或る緊急な問題についてワダ氏の意見を伺いたいからだ、ということを貴方に念を入れて申しあげておいた筈ですが……」

青年紳士の語気は何となく、かすかに気色ばんでいた。そんなこともあろうかと念を押しておいたのに、といった言外の非難の棘が感じられた。

「いや、そのことは、私もワダには、とくと云っておいたつもりです。いくら酔っ払いの私でも、勘

どころは嗣忘れはしませんよ。フランス代表部が、君をとって喰おうといったような話じゃなさそうだ、察するところ、どうも君の知慧をかりたいらしい話じゃよ、とね。ところが、その時、彼が答えて云うのに――たいてい越南のことだろうが、しかし、今さら越南問題について、ぼくの知慧をかせの、手をかせのと云われたって、何とも返事のしようがない。今となっては、ちょっとやそっとで片付く問題じゃないですからね、と奴さん厚い唇をゆがめて苦笑していましたよ。苦笑いしてから――手をかさぬのなら、こちらにも考えがある、とでも代表部は云うでしょうかね、と皮肉な物云いをしながら、ちょっと真剣な顔をみせましたよ。私が、まさかと云うと、いや、向うさんが折角会いたいと仰言るのなら、勿論会いますがね、ときっぱり云ってのけましたよ。だから、今朝奴さんきっとやってくると、私は思ってますよ。あの男、いっぱしのサムライですからね」

と云って、モレノは口を噤んで、ひと息いれた。そして、ちょっと考えこむような表情をみせたが、ふっと想念の糸を摑んだように、独り合点しながら、言葉をついだ。

「ワダって男は、おかしな男ですよ。暫くつきあってみると、すぐ判りますがね。奴さん、まるで日本人らしくないところが眼につくと思うと（何せ十五、六年もフランスで暮した男ですから。いや暮したというより、二十そこそこの青年時代から、ずっとフランスで育ったという経歴の持ち主ですからね）、その反対に、ひどく日本人らしいところのある人間ですよ。昔のサムライ的な道徳というか精神というか、そんなものが、彼の心のうちに、かなりつよく生きている。奴さん自分じゃ、セト内海の何とかいう島の漁師の息子だなんて、得意そうに話すことがあるが、私は私で、君の親父さんは漁師だったかも知れないが、先祖はきっと謀叛人か落武者かで、それがいつの間にか漁師になったのかも知れないよ、と云ってやると、ワダの奴、或はそうかも知れませんね、と満更でもない顔をし

てますよ。兎に角、奴さんいっぱしのサムライだから、一旦来るといったからには、約束をまもってやってきますよ。……それから、ワダって男はね、日頃は、なかなかの慎重居士で、見る人によっては、なかなか狡いところのある日和見主義者にみえたり、時には八方美人的な動きもする男だが、いざとなると、案外、平気で大胆な放れ業をやってのける男ですよ」

モレノは、またひと息ついで、うす緑がかった乳色のペルノ酒を口にもって行った。そして、記憶を呼びおこすためか、しきりと頭を左右にゆすぶりながら、話しつづけた。

「例えば、こんな話がありますよ。去年の夏の八月のはじめ、日本がポツダム宣言を受諾するらしいといった情報がはいってきたときのことですがね。日本の大使館や軍の首脳部がまだ半信半疑でいた頃だったが、奴さんは何を思ったか大急ぎで、旅に出る準備にかかりましたよ。旅といっても——後になって判ったのだが——少くとも一年位、ラオスの奥地のジャングルにたてこもる計画で、その用意をはじめた。日本がいよいよ手をあげる場合を見越して、そのときは思う存分、自由行動をとるといった肚をきめて、ハノイ脱出の仕度にかかった訳ですよ。今になって考えてみると、ワダは肚の中で、どうせインドシナの何処かで死ぬことになるのだろうから、ここで死ぬのなら、それまで思うだけのことを存分にやってのけようと決心したのでしょうな。奴さんが日頃よく使う言葉をかりると、行為でもって綴る遺書をのこしたかったのでしょうな。……そうこうしているうちに、日本の無条件降伏が果して事実となった。そこでワダは、さあとばかりに彼の自動車——奴さんはスポーツ型の物凄く速力の出る車をもっていた。運転手もおいてね——の他に、幾台かの自動車とトラックを寄せあつめてきた。機関銃、小銃、拳銃、手榴弾と手あたり次第に武器を蒐めてきた。次に食料品、薬品類、服地、衣料、その他日用品類、それにラジオ、書籍まで積めるだけのものをトラックに積みこんだ。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

印刷用の紙まで二、三十連積んだ。奴さん、日本降伏のどさくさ紛れにつけこんで――まあ文字通り虚脱でしたな、あの頃の日本人のモラルってものは――恐らく軍関係や商社から無料供与をうけたのでしょう。仏印ドル（ピアストル）も、自分の持ち金だけでは問題にならないので、商社の友人たちから借りられるだけ、いや貰えるだけ貰ってきたのでしょうな。敗戦で自暴自棄になっているので、商人たちも棄てるつもりで、かなりの額の金子を融通してくれた者もあるらしい。中にはワダと越南独立運動の関係を知っていて（ワダのつながりは親日派のナショナリストだけでなく、戦争中から反日陣営のナショナリストやコムニストにまで手をのばしていたという風評があった程です）、将来何か役立つことになるかも知れぬといった商人らしい胸算用から、献金のつもりで金を出した一流商社の支配人もあったようですな」

モレノは、ぐっと唾液をのみこんでから、唇に杯をあてがった。

「いよいよ、山中放浪の旅にでるための、あたかも隊商そっくりの仕度が出来ると――八月十五日か十六日のこと、日本の無条件降服のニュースは、もうインドシナ中に拡っていました――ワダは先ず第一に、或る種の越南人を急いで召集しました。彼らはみな親日系の、或は日本人との協力によって知られていた越南独立運動者たちでした。コムニスト系と云われている越盟党（越南独立同盟の略称ホー・チミンはその党首）が日本の降伏と同時に、ハノイを占領して新政権をたてることになろうが、そのとき先ず血祭りにあげられるのは、今まで抗日の中心だった越盟党によって《越奸》、つまり祖国にたいする裏切者、売国奴と呼ばれてきた連中だったのです」

「何のために、よりにもよってその親日派を狩りあつめたんです？　コムニストとつながりのあったと云われるワダ氏が、明日の主権者と、わざわざ事を構え、楯をつく立場をとるなんて……」とフ

ランス代表部の青年紳士は怪訝な表情をして訊ねた。

「何のためだと思います？」とモレノは、ペルノ酒の杯を一寸あげて、まるで《ブラヴォ・モン・プチ！（息子、でかしたぞ！）》と云わんばかりに眼を輝やかせ、ワダにたいする友情と誇りをこめた語調で云った。

「この越奸たちの生命を助けるためですよ。……彼らを亡命させるためだったのですよ。——ワダに云わせると——さあとなると、今まで彼らを散々使っておきながら、日本の軍人や外交官たちは、恐らく、ほんの形式ばかりの涙金か何かを呉れてやるだけで、あとは知らぬが仏をきめこむに決っている。独立運動者を使ったのも、結局越南の独立を援けるというより、日本政府の利己的な政策のために利用しただけのこと（モレノは唇を歪げて、さも忌わしいといった表情をして云った）。だから、いざ越盟党が一斉に弾圧をはじめ出すと、そのときは彼らを見殺しにすることになろう。しかし俺は、彼らを見殺しにしたくない。日本人の誰も彼もが、法螺吹きで嘘つきで恥しらずで、腰抜けだったと奴らに思われたくない。いや、少くとも一部の日本人は心の底から、この民族の独立を念願し、大義名分から独立運動を手伝った。親日派の連中だって、日本人に節を売ったのでなく、日本人との協力によって越南独立をかちとろうとしたのだ、越盟党も愛国者なら親日派の連中も愛国者だった、ただ、別の途をえらんだだけのことだ。それは、後になったら必ず判る。だから、今まで彼らの友人であり同志であった俺は彼らを見殺しに出来ぬ。日本政府が彼らを見殺しにするなら、俺はそんな日本政府を無視してでも、生命をかけても奴らを助けてみせる。コムニストによる弾圧の嵐の吹きまくる間は、何処にでも安全地帯をめっけて、そこで面倒をみてやる。そのうち二ヵ月経ち三ヵ月経てば、少くとも半年経てば革命期の昂奮や混乱も納まり、越盟党の連中も落着きをとり戻すことだろうし、またイ

ンドシナの独立をめぐる内外情勢もはっきりしてくるだろう。その上で、ゆっくり彼らの身の振り方を考えたって遅くはない。大ざっぱに云えば、まあこういった考え方を、ワダはもったわけですよ」

「それで、八月十五日後になって、ワダ氏はどうしました？」

いつの間にか、モレノ氏の前の椅子に坐っていたフランス代表部の青年紳士は、膝をのりださんばかりにして、耳をかたむけた。

「八月十七日か十八日、越盟（ヴェトミン）党は御存じのように、忽ちのうちにハノイを占拠したので、その直後の四、五日というものは、このハノイの街全体がまるで気が狂ったようなごった返しの騒ぎだった。晝夜ぶっとうしで拳銃の音がぽんぽん花火のようにあがってましたよ。街中到るところ、ここでもかしこでも、親仏、親日の差別を問わず、外国帝国主義の協力者や反革命派とみなされていた連中を越盟党のコムニストたちは血眼になってさがし出して、どしどし片付けていた有様でした。まあ革命テロが大手を振って横行した有様でした。私などのような、しがないフランス人ですら、日本人との関係から仏奸（ファブ・ジャン）扱いをうけて、すんでのことで、この家を焼かれるところでしたよ。越南独立支持とまでは行かなくても、越南自治には日頃から賛成していた謂わば《越南の友》をもって自他ともに許していた私までも狙われたのですからね……」

全くもって心外の沙汰だ、と云わんばかりにモレノは、口をあけたまま両手をひろげて云った。大分酔がまわってきたのだろう、彼の饒舌は堰を切ったように流れだした。ワダ・アキラのことを喋舌りたくてたまらなくなったようである。まるで身内の者の自慢話をはじめたように。

「ところで、ワダは、ハノイ駅近くの、住宅街の中心にある或る家屋に、かつて対日協力派の、主だった独立運動者たちをあつめた。そして、その建物の前には土嚢でバリケードをつくらせ、窓とい

う窓に機関銃の銃口を列べるといった大袈裟な構えでしたよ。来るなら来いといった自信の程をみせたのですな。この機関銃の巣さながらの家の壁には、漢字とローマ字綴りの越南語ででっかく大越国民党本部と大書してあったが、これは謂わば共産系の越盟党のために生命を脅かされている連中が、これから一蓮托生で行こうと決心して、急ごしらえにつくった団体の名前なんです。大越国民党といった名前をつけたのは、多分かつての独立運動団体であった大越党の領袖が多く集っていたということと、コムニスト系と云われている越盟党に対抗するには、どうしてもナショナリストと名乗りをあげる必要があったからでしょうな。じじつ、この新しい政治結社に参加した連中の多くはナショナリストだった……兎に角、ワダって男が、世間並の日本人でないことだけは確かです。ハノイの在留邦人が晴天の霹靂よろしく突然降ってきた無条件降伏で、脳天にどかっと一撃喰わされ、呆然として為すことを知らぬ状態にあったとき、ワダの奴は、さあ俺の仕事はこれからだぞ！　と云わんばかりに、ハノイの街のどまん中で、時の氏神だった越盟党から覗われている越南人たちの守護役を買ってでたのですからな。ね、一寸した芸当でしょう、奴さんのやってのけたのは。……ここで念のために云っておきますが、ワダは自分のやることについて、日本側の軍人や官吏の意見は勿論、誰の意見も、これっぽちも求めなかったことです。そりゃ、二、三の親しい友人には、自分の計画を打明けて話したらしいが、彼らがみな口を揃えて、そいつはとんでもない冒険だ、そいつは軽挙盲動になる、いやインドシナにいる十幾万の日本人全体の立場を慎重に考えて行動すべきだ、などと忠告しだすと、ワダは——よし判った！　と一言云って口をとじてしまったそうです。手前勝手で利己的な政策のためには、越南の志士や革命運動家を使うだけ使っておいて、さあ敗戦となると、独立運動者など、そんな人間は見もしなかった聞きもしなかった、係りなどはとんでもない！　とばかり、涼しい顔をし

ている我身大事の日本の軍人や官吏たちに見棄てられて、見殺しになろうとしている連中の骨拾いの役割、そいつをワダが買ってでたのは、奴さんの自我のつよい、天邪鬼的な性格——こんな性格が政治イデオロギイのかたちをとるとヒューマニズムと無政府主義をちゃんぽんにしたようなものになるらしいが——も随分手伝っていると思いますがね、それ以上に、奴さんの胸の底に《サムライの道》といったモラルがつよく働いていたからだろう、と私は見ていますがね。後月、奴さんに、どうだ、そんな気持でやったのじゃないのか、とずばりと訊いてみたことがあるが、するとワダは厭な顔をしましたよ。しかし、そいつは奴さんの羞しがりの気質からきているので、本心は、あれで案外昔気質の、武士道というか何というか、そんなモラルを身につけた日本人だ、と私は思っていますよ。……まあ、えらいお喋舌りをしちまったが、さっき、貴方に云いたかったのは、このことなんですよ。あのサムライは今朝きっとやってくるだろうってことをね」

青年紳士は、モレノの話に異常な興味を覚えたのであろう、乗り出した上半身を崩さないで、語り手の顔をじっとみつめながら云った。

「それで越盟党は、どうしました？　ワダ氏と、大越国民党の連中に対して。いちおうの挑戦としてうけとったでしょうからね」

「何ともしなかったよ。それだけじゃない、ワダたちの陣取っている本部のあるところを、さすがの越盟党の示威運動も避けて通った。ハノイの街中は、あそこで、機関銃の打ち合いが今にもはじまるだろう、ともっぱらその風評でもちきっていましたがね。越盟党の指導者だって、この敵意をあらわにした建物の始末にはさすがに頭を捻って考えたことでしょう。何しろ天下をとったばかりの破竹の勢もあり、気負いたった若い党員はいるし、それに面子の問題もありますしね。ところが、結局、

指導者はあすこに手出しをしてはならぬ、と厳命を出したようですな」

「そりゃあ、どうしてです？」

「ワダって男は、さっきも云ったように、ああ見えて、どうしてなかなか抜け目のない人間で、確かに狐のような狡さも身につけたところがある。彼は、その大越国民党本部というのをね、日本軍の下級将校や下士官などの宿舎のかたまっている界隈にもってきたのですよ。判りますかね、この場所をえらんだところが味噌なんですよ。何故かと仰言る？　その種明かしをすると、こうなんです。インドシナの日本軍の若い将校や下士官たちのうちには、ポツダム宣言受諾にたいして烈しい反撥と遺る瀬ない忿懣をもった連中が少くなかった。たとえ天皇の命令にそむくことになっても、何らかの形式で大東亜戦争をつづけるべきだ、いざとなれば集団脱走したって構わぬ、ジャングルに潜んでも、捕虜となるより、最後まで戦いつづけて死んだ方がどれだけましか知れない、といった気負い立った連中が沢山いた。彼らもやはりサムライ族ですな。それからもう一つ、頭に入れておかねばならぬのは、彼らはビルマやフィリピンの日本軍とちがって、ここでは無疵の軍隊だったってことです。兎に角、知慧や分別のあるなしにかかわらず、この連中の心意気と純情は、私みたいな廃物そっくりの人間の心にも、ぴいんときますよ。私自身が意気地のなくなった人間だけに、こんな純情型の、勇気のある若者は大好きです。なつかしいですよ、自分の若かった時のことが想い出されてね。私だって、二十そこそこで、パリの学校を出るなり、仏印のジャングルの真っ只中に鉱山助手としてやってきたのですからね。……だいたい、さっきも貴方にお話ししたように、日本の降伏が判ったとき、軍官民を通じて、ハノイの日本人社会の上層部の連中は百人のうち九十人までがべしゃんこになり、虚脱状態に拋りこまれていたのは事実ですが、それに比べると血の気の多い若い連中には、居ても立っても



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com